

P-229 末梢血幹細胞移植を併用した大量化学療法 の臨床経験

九州大学胸部疾患研究施設

○中西洋一、川崎雅之、八並 淳、萩本直樹、松木裕
暁、高山浩一、若松謙太郎、落合早苗、橋本修一、
原 信之

【目的】末梢血幹細胞移植(PBSCT)併用下の大量化学療法を施行し、安全性等につき臨床的検討を加えること。

【対象と方法】対象は4例の悪性腫瘍患者。内訳は、肺小細胞肺癌、肺大細胞癌、子宮小細胞癌術後の肺転移、縦隔胚細胞腫。基礎疾患を有しない24~53歳の患者で、VP16の用量を高めたPVP療法(CDDP 80-100mg/m², VP16 720-1200mg/m²)後の骨髓機能回復期に採取した末梢血幹細胞(CFU-GM;1.5x10⁵/kg)を、VP16 1200mg/m²とCBDCA 1700~2100mg/bodyによる大量化学療法の2日後に輸注した。

【結果】PBSCT後の骨髓機能回復に9~11日を要した。全例でNadirの時期に発熱がみられたが2~10日で解熱した。肝腎機能障害はgrade 1以下であった。治療効果は前治療でPRが得られた4例中、3例はPRが持続し、1例がCRとなった。

【考案】重篤な副作用もなく、PBSCT併用下の大量化学療法を施行することができたが、PBSC採取のためのMobilizationの至適条件やConditioningの化学療法のレジメンについては、今後系統的に検討して行く必要があると思われた。

P-231 非小細胞肺癌化学療法時のrG-CSF併用投与 に関する検討(第2報)

東北肺癌化学療法懇話会

○斉藤純一、小犬丸貞裕、鈴木修治、塚本東明、
安西吉行、武内健一、佐山恒夫、萩原 昇、
石川哲子、太田 隆、麻生 昇、中井祐之

【目的】非小細胞肺癌化学療法時の白血球減少に対するrG-CSF投与による化学療法のdose intensity(DI)の増大を目標とした比較試験を実施した。

【対象と方法】1992年1月より、75才以下、PS 0-2の切除不能非小細胞肺癌に対し、CDDP 20mg/m²day1~5、VP16 60mg/m²day1~5、MMC 6mg/m²day1の化学療法を実施し、rG-CSF 2μg/kgをA: day 6 から、B: day10 から、12日間連日皮下投与の2群に無作為に割りつけ化学療法を可能な限り21日間隔で繰り返した。

【成績】94年6月まで、A法31例、B法32例が登録され、A法30例、B法30例を評価した。1コース目の白血球最低値は、A: 4216/mm³、B: 4375/mm³で、Grade 3以上は、A: 4.2%、B: 25%。化学療法の投与間隔はA: 24.9日、B: 24.8日。過去の成績と比較すると、DIはA、B間で有意差はなかったが、増大が認められ、奏効率は、A法29% B法42%で、明らかな改善は認められず、血小板減少の頻度がやや高かった。

【結語】rG-CSFの併用投与にて、DIの増大が得られたが、奏効率には改善は認められなかった。rG-CSFの投与にて、白血球減少Grade 3の症例が認められ、支持療法としての有用性をさらに検討する。

P-230 肺癌化学療法時の骨髓抑制に対するrG-CSFと OK-432との併用効果の検討

京都第二赤十字病院内科¹、京都府立医科大学第二内科²

○平盛法博¹、笠松美宏¹、原 洋¹、林 英夫¹、
後藤武近²、藤井恒夫²、藤田幸久²、岩崎吉伸²、中村泰三²

【目的】肺癌化学療法時の骨髓抑制に対しrG-CSF単独投与とrG-CSFとOK-432を併用した場合の好中球数及び血小板数の推移について比較検討した。

【対象】2コース以上化学療法が可能な肺癌症例10例で腺癌4例、扁平上皮癌3例、小細胞癌2例と転移性肺癌1例であった。化学療法の内容はCBDCA+VP-16 9例、CBDCA+VP-16+THP 1例であった。

【方法】1コース目に化学療法開始日より7日目から14日間rG-CSFを100μg/日皮下注(A群、G-CSF単独投与群)した。同じ症例の2コース目にはrG-CSFは1コース目と同様に7日目から14日間100μg/日皮下注し、また化学療法開始日よりOK-432を0.5KEから開始し3、4日目は1KE、5日目から20日目までは2KE皮下投与(B群、G-CSF+OK-432投与群)し、それぞれ好中球数と血小板数を測定した。

【成績】A群の好中球最低値の平均は1366±335/mm³、B群では2638±486/mm³(P<0.01)で、好中球減少のGradeはA群の平均1.9±0.45、B群の平均0.9±0.43(P<0.05)であった。血小板最低値の平均はA群で4.67±0.87×10⁴/mm³、B群では6.34±1.25×10⁴/mm³(P<0.05)で、血小板減少のGradeはA群の平均2.8±0.44、B群の平均2.1±0.43(P<0.05)であった。

【結語】肺癌化学療法時の好中球減少と血小板減少に対しrG-CSFとOK-432の併用はrG-CSF単独投与より有用と考えられた。

P-232 原発性肺癌の化学療法におけるG-CSFの有用性 についての検討

浜松医科大学第2内科

○豊嶋幹生、佐藤篤彦、森田純仁、内山 啓、岩田政敏、
源馬 均、谷口正実、渡辺孝芳、秋山仁一郎、早川啓史、
千田金吾

【目的】原発性肺癌の化学療法におけるG-CSFの有用性について検討する。

【対象と方法】化学療法が施行された原発性肺癌36例(扁平上皮癌8、腺癌13、大細胞癌1、小細胞癌13)においてG-CSF投与状況、白血球数、好中球数最低値、白血球数2000/mm³、好中球数1000/mm³以下の期間、感染症併発の有無について検討を加えた。非小細胞癌はCDDP80mg/mm³D1、VDS2mg/mm³D1D8、VP-16 50mg D1-21、小細胞癌はCDDP80mg/mm³D1、CPA300mg/mm³D1、VP-16 50mg D1-21で化学療法を行った。

【結果】延べ60クルルの化学療法が施行され、G-CSFは36回投与されており、平均投与量および期間は127μg、10日であった。白血球数、好中球数最低値は平均でそれぞれ2500/mm³、930/mm³で、白血球数2000/mm³以下または好中球数1000/mm³以下の期間は平均4.4日であった。感染症併発は11回/60クルル、18.3%に認められ、感染部位は呼吸器5、尿路2、不明4であった。全例が抗生剤投与により軽快した。

【結論】G-CSF併用下でもかなりの頻度で感染症の併発が認められたことより、G-CSFの効果には限界があるものと考えられた。